海潮音

256

特46 三
980

海潮音

明治
41 8 17
内交

目次

一 觀世音……一
一 救濟のすがた……七
一 み名を稱えよ……一七
一 門を叩け……二八
一 菩薩の慈悲……四六
一 菩薩の智慧……六〇
一 勝れたる友……六九
一 信仰の涯生……七九
一 清淨光……九三
一 海潮音……一〇二

海潮音

觀世音

安田慶淳著

希臘の文人はオリンプスの殿堂に神机の煙りを薫らし、
獨乙の哲士はケイニヒベルヒの講座に大聖カントの跡を
慕ひしとかや。

げにや恒河の流れたえせぬ水底に洗はるゝ纖細なる一粒の砂すらも、なほそれ清しと聞くに我等が信頼したてまつる觀世音菩薩の跡は、たとひいさゝかなる事なりとも、珠にもまして尊きみ影のやどらでであるものかは。

甘露を湛へたる淨瓶と、軟風にそよげる柳條とは、これ我等が菩薩の標章にして、我等が菩薩は實に慈悲と、憐愍と、同情と、すべてこれ等、人心の最も優美なる一切を含みたまふ。

彼の愛を以つて充たされたまひし聖母マリアの花の如き姿が、西歐の文明に多くの優しき感化を與へられたるが如くに、慈悲と優美との權化たる、我等の觀世音菩薩が、東洋の人心に影響して、宗教上に於ては云はずもあれ、文學美術等の各方面よりして、多大の慰藉と教訓とを與へられし事實は、到底否むべくもあらず。

靈鷲山頭、佛陀法燈を懸けて法華を講ぜられたる時の如き、この觀世音菩薩の普門示現にして濟度自在なる利

益を說かせられたまひ、惇々として他かず滔々として亂れず。佛陀一代の說法中、かくまでに菩薩の濟度自在にして、その功德の廣大なるを讃稱せられたるものあるを見ざるなり。

さればにや。觀世音菩薩の御名は、ところとして知られざるはなく、ところとして湧かざるはなし。

あはれ我れ、霧ひくう流るゝ山村の朝きよらかなる鐘の音とともに、この菩薩のみ名が遠近の賤が家より漏るゝを聞きて崇高なる感にうたれたること幾度なりたりしぞ。

または街燈漸く暮靄の中に瞬きそむる驛路の夕悠揚として起る讃頌『普陀落や』の一曲に耳かたむけて、隨喜の涙に胸かき抱きて心ゆくばかり泣き咽びたるもの、豈ひとり我れのみにあらざるべし。

我等は今この菩薩に信賴し、この菩薩に憑りて、安きと慰めとを享けんと翼ふもの、たゞひたすらにこの菩薩

に縋りたてまつらむとす。

世の心なき人は嘲と哂とをこの菩薩に加ふ。されどこれ等の人は、如何ばかり多くの人が、この菩薩に縋りて、あらき世の波風を、今現に安らかに越えつゝあるかを知らざらむ。

あはれ我等が世に、この菩薩あるは末枯の野に咲きのこる野菊あるが如し。

救濟のすがた

『星も山も生けるにあらずや。岸打つ波は精神を有せざるか。露滴も洞窟も共に幽默なる涙を流す情なきか』。

（バイロン）

あゝこの星のみならんや、山のみならんや。燦然たる大千何ものか之れ、眞如法性の顯現ならざるものやある。廣長舌を弄ぶもの、豈ひとり溪聲のみならんや。般若

を談するもの、豈ひとり松風のみならんや。清淨身を觀ずるもの、豈ひとり山色にのみ倚らんや。み空の月影は到らざる隈もなく、武藏野に生ふる少さき草の葉末にまで、身を細め影を縮めてぞ、宿れりと聞くものを、我等が救濟主なる觀世音菩薩は、我等に來り、我等に降り、我等を慰め、我等を守りたまふに、なぞて唯一つの御身相をのみ現せられたまふべき。

佛身を以て說法したまはんときには、即ち佛身を現じ

て說法したまひ、辟支佛身を以て說法したまはんとするところには、即ち辟支佛身を示して說法したまひ、乃至、聲門身。梵王身。帝釋身。自在天身。大自在天身。天大將軍身。毘沙門身。小王身。長者身。居士身。宰官身。婆羅門身。比丘及び比丘尼身。優婆塞及び優婆夷身。童男童女身。天龍八部。惡鬼魔神等にいたるまで、我等が菩薩はあまねく形を變じ、あらゆる相に隨つて、我等衆生の樂欲に應じ、その苦患を癒したまふと聞く。

あはれ我等が觀世音菩薩のみ姿は、これ天地の間に輝きたまふ至靈の體なり。これ眞如なり。これ法性なり。

ある時は法界身を現して宇宙に遍滿し、ある時は五尺の小身を現じて我等が前に來影し、我等を導きたまふ。

かくの如く、我等が菩薩は普現色身三昧の力を以て無量の身相を現じ、我等を呼び、我等を招ぎ、慈悲のみ袖もて覆へたまはんとすれど、迷惑なる我等が眼は盲ひて見えず、我等が手は垂れて縋らず、我等が足は痿えて行

かず。こゝに慈悲のみ袖より脱れて自ら苦しみと痛みとの中に惱む。

しかのみならず、驕傲なる我等はこの菩薩大悲の慈光を仰がず。疑惑と、忘執と、顚倒と、執着との心は常にその救濟の主に縋りまつらずして、かへつて菩薩矜哀の御手を拂ひ除けまつらんと企つ。我等が昏愚悲しみても猶あまりあるにあらずや。

さあれ、尊きは菩薩大悲の大御心にてあるかな。かくの

如くにしても、猶我等を捨てたまはず、猶我等を離れたまはず。あはれ深厚なるは我等が菩薩の慈悲憐愍にあらずや。

我等は闇路より闇路、迷路より迷路と、常に惑ひて浮草の住所定めぬ、我等が爲に、形を變じ相に隨へ、我等が知らざる間に、我等を安んじ、我等を護りたまひし菩薩の、洪大無邊なる恩惠に離れ、一歩一歩この救濟主のみ袖より脱れ、刻々光明の外に背き去んとして、しかも、

行く可き方向すらも見出すこと能はず。憐れむべからずや。

我等が菩薩は、己れに離れ去るものを呼び、己れに背き遠ざかるものを矜み、慈悲のまなじりをたれて、生死の海に沒溺せる我等衆生を、救濟し正しき道に歸せしめんと願ひたまふ。

我等が、常にこの菩薩を口に心に念ずるところ、み名を稱えまつるところ、菩薩は直ちに我等が側近く來りた

まふ。我等既に菩薩と共に座し、菩薩とともにあり、天下何ものか畏るゝに足るところのものあらんや、何ものか成らずと云ふところのものあらんや。

世の友よ。この卑き賤しき我等が生命を、我が尊き菩薩に捧げたてまつりなば、火の中、水の中、すこしも恐るゝに足らざるものを、菩薩矜哀のみ袖、かくして我等を覆へたまふ上は、心を勞せずしてあれよ。

我等が信頼は、これ熱誠の凝結たらずんばあらず。牢

乎たる信念それかくの如くならんには、天上天下何ものかよく抗塞をあへてせん。信頼の極は歸命なり、献身なり、沒我なり。我れを沒却するはなか〳〵に苦るし。さあれ、これ我れを助け、我れを求むる、所以にあらずして何ぞや。

我れを沒し去り、この身を献げまつりて、たゞたゞ菩薩の膝下にその去就を決す。既に決す。斯くて世に立ち、世に處するに於て、確たる信念ありて、綽々たる餘裕

の裡に人たるの面目を保ち、赫々たる光明を仰ぎて、日日の行動を全ふするに難からず。

み名を稱えよ

我等が菩薩は超世の大願を發させられ、しかもみな滿足せられたまひぬ。

乃ち

第一願には、一切の法を得ん。

第二願には、般若の船を得ん。

第三願には、智慧の風に値はん。

第四願には、善方便を得ん。
第五願には、一切の人を度せん。
第六願には、苦海を超えしめん。
第七願には、戒定を得ん。
第八願には、涅槃の山に登らん。
第九願には、無爲の舍に會はん。
第十願には、法性の身に同じからん。（弘猛海慧經）

と。

重ねて誓ふて曰く

『三たび我が名を稱えんには往きて救はん』

と。尊ふとからずや、衆生救濟は則ちこれ我等が菩薩の誓願にして、大慈大悲は則ちこれ我等が菩薩のみ體なり。我等はこの菩薩の救濟を求め、その慈悲を翼ふものなり。

我等が菩薩はみ名を以て、我等を護り、我等を助けたまふ。我等は常に、この菩薩に歸命し、信頼したてまつ

ると云ふも、眞理に暗き我等が心眼は、常に盲ひてこの菩薩を知ることあたはず、この菩薩を拜したてまつることあたはず。あはれ悲しみてもなほあまりあるにあらずや。

我等が菩薩はこれを矜みたまひて、たゞ尊きそのみ名をのみ示し、我等をして信心歡喜せしめたまふ。

尊きかな、我等が菩薩は有情の音聲を以つて歸命し、信頼したてまつるものには、大慈大悲の廣大なるみ惠みを以て衆生の音聲を觀じ、世間の悲しみと苦しみと痛みとを救ひ、歡喜と幸福とを與ひたまふが故に、觀世音と名づけたてまつる。

我等、常にこの菩薩の御名を稱え、この菩薩のみ名を信じ、この菩薩に縋りたてまつるによりて、菩薩大悲の大御心に住し、その救濟を蒙ることを得。うれしからずやは。

我れに來るものをば輔け、我れに祈るものをば救はむ

と、大悲矜哀の限りなき、なほ自ら尊きより卑きに降りたまひて、我等を慈みたまふ。あはれ我等報恩如何にしてか運びたてまつるべき。

世の友、我等が菩薩の召換の聲をきかんと欲するものは、常に此菩薩の尊きみ名を心に念せざるべからず。我等が菩薩の攝受の唱きを望まんと欲するものは、この菩薩の尊きみ名を口に稱えまつらざるべからず。

行住に座臥に、常に念じ、常に稱えまつりてやまず。

かくの如くんば菩薩大悲のみ袖、なぞて我等が上に覆はれざるを嘆かん。この菩薩のみ名を念じまつり、この菩薩のみ名を稱えまつるところ、これ則ち我等が菩薩のましますところなればなり。我等が菩薩のあらはれたまふところなればなり。

『佛名を稱するが故に念々の中に於て八十億劫の生死の罪を除く』(觀經)

つら〳〵己れを顧みるに、渾身みなこれ、罪障の塊り

ならざるはなし。我等が常に起さんと欲するの善心は、露ほども起らずして、脱せんと欲するの惡心は、二六時に我が胸を焙く。あゝ我等は遂にこの欲する善心を得ざるか。あゝ我等は遂にこの罪惡の炎より脱することを得ざるか。

『大力の鬼あり忽ちに帝釋の床に生ず帝釋瞋を起せば鬼の光明愈熾なり帝釋慈心を發すれば鬼の光明即ち滅し尋て離れ去る』(阿含經)

鬼とはこれ三毒の當躰にあらずや。三毒の當躰これすなはち罪障にあらずや。

帝釋すらなほ鬼に惱まさる。況や我等凡夫に於てをや。しかれども我等が菩薩、施無畏大士の德、よくこれ等の鬼を除きたまふ。智惠に暗き我等、機根に劣れる我等は、たゞこの尊き菩薩のみ名を稱えまつるによりて、之れ等の惡鬼より免るゝことを得。何ものゝ幸福かこれに過ぎん。

みるめなき涙の底にしつむ身を
法の海にもうかべてしかな　（従二位宗隆）

おりたちてたのむとなれば飛鳥川
ふちも瀬になる物とこそ聞け　（平忠度朝臣）

二十四時中、行住にも、座臥にも、この尊き菩薩のみ名を心に念し、口に稱えまつれ。我等が諸々の罪障の苦惱

は、この菩薩のみ名に縋り、み名を稱えまつるによりて解脱することを得べし。

罪の解脱。これ我等人類が最終の目的たるべきなり。

門を叩け

叩けよ。されば開かるべし。求めよ。されば與えらるべし。

大慈大悲者は、などてパンを覓むるものに、石を與えんや。蛇を與えんや。限りなき熱誠を以て、信頼するものは救はるべし。

世の惡しき者すら、その子には善きものを與ふるに、

ましてや、我等が尊き菩薩は求むるものに、なぞて、善きものを與えざらむや。

西に、東に、多くの人は名利を求め、位階を求めむがために走る。されど我等はこれを求めず。我等が求むるところのものは、滿足ある地位なり。安心ある境界なり。

滿足と安心とを冀はんと欲するものは、先づ信仰を求めざるべからざるなり。信仰を求めて、菩薩の道に勇猛精進せざるべからざるなり。

白雲は常に徂徠して、咲きたる花は遂に散りぬ。無常はこれ萬象の實相にして、また我等人生の實相にあらずや。

生死は我等の一大事なり。常にこの理を明らめずんば、事に臨みて動着し、危きに際して逡巡せん。

世の友。退いて少しく思はずや。我等この世に生れ來れりと云ふ。さあれ、我等は活きんがために生れ來りたるにあらずして、かへつて、死せんがために生れ來りた

るに、あらざるなきか。我等は生をつゞけんがために、食ひつゝあるにあらずして、かへつて、死に近つかんがために、食ひつゝあるにあらざるなきか。故に生を喜ぶべくんば死もまた喜ぶべきにあらずや。死を悲しむべくんば生もまた悲しむべきにあらずや。

生必ずしも生にあらず、死また必ずしも死にあらず、始めもなく、終りもあることなし。流轉還滅は畢竟無明に執するの名目のみ。

我等迷惑にしてこの理を解せず生を見ては喜び死を見ては悲しむ。かれを愛し、これを憎み、身心惱亂して休息あることなし。

あはれ、かくて無常遷流の我等、何れの時、何れのところにか、安心の地位に立ちて、常住の生命を求め得可き。

無常普遷するものは、賴むべからざるなり。世の多くの人の賴まんとする名や、財や、權勢や、うたかたのそ

れよりも、あだなるものと知らずや。あるものは名を求めて、求め得ざるを嘆き、あるものは財を失ふて悲しみ、あるものは權勢より墜ちて苦しむ。これ賴むべからざるものに憑りて、安きを求めんと欲したる結果にあらずして何ぞ。

我等は嘗て、米國の石油王ロックフェラー氏の夫人が、一皿の牡蠣をすら自由に食ふ能はずして、嘆息したりしと云ふことを聞きて、富豪もまた憐れむべきものなるこ

とを感じぬ。

また名譽なるものにつきて之れを見んか。彼の功名一代を伏壓したる英雄と雖も、年月の經過と共に漸く人に忘れられんとするが如きことは、何人も事實に於て之れを認めつゝあるにあらずや。乃木や。東郷の、光譽赫々たる日露戰爭當時に於ては、楠氏や新田氏やの勇名は少なくとも尋常世人の腦裏に薄らぎたるなきやを疑はしめられたるにあらずや。あはれ、かくの如くにして今後幾

年かの後を豫想したらんとき、顯なるもの愈々晦となり、明なるもの愈々幽となり、この名聲なるものも遂に水上に現はれたる、一の波紋たるに過ぎざるを知る。

あゝ彼の富のみならんや。あゝこの名聲のみならんや。あてにならぬものをあてにして心の安きを求め、思の穩かならんことを冀はんとしつゝあるものは、すべて憐れむべきにあらずや。

ある成功論者は、我等に富と、名と、地位とを、滿足

に獲得したるものをば、世に成功したるものといふと、敎ひぬ。さあれ世の友、利欲と虛榮との念を離れて、おもむろに靜思熟慮せよ。かくの如き成功者が、如何ばかり精神的不具者なるかを。またこれを模範とすべきことの、いかばかり恐るべきものなるかを。

よし僥倖にしてその冠は瓔珞を以つて飾らるとも、そが頭に鐵の如く重からば悲しかるべきにあらずや。よしその衣服は如何に美はしくとも、蕀の如くその胸を刺さ

ば辛かるべきにあらずや。

終日、馬背に乘じて千里の遠きに運ばれ、我れ自ら、かくの如くの遠きを飛び來れりと、蠅の云はゞ、其蠅の痴や憫笑すべきに値せずや。

立てる農夫は、座せる紳士よりも高しと云ふにあらずや。時に得ることあるも、時に失ふことあるも、また意に介せず、自己の天分を知り、眞摯にこれを實行し、しかも處世の境を自由に往來するものあらば、是れ實にそ

の業に成功せしものと云ふべきなり。これ眞に人生の目的たるべきなり。

トラファーガルのチルソンは、そが最後の言をなして曰く。

『英國人をして其天職を盡さしめよ』

と。この天職。これ我等が營むべく、果すべきものにあらずして何ぞや。これ菩薩の行にあらずして何ぞや。

我等が世に處して事業を爲す、豈必ずしも富と名と地

位とを求めんが爲めならんや。世の友。如何にこの三者が處世の境を自由に往來するの樂に比して、甚だしく輕きかを知れ。

生死を超絶すれば、生死なく、花の開落を一視すれば、開落を見ずして花を見ることを得。かくの如くにして我等は愛憎、好惡、喜怒等あらゆる差別あるものを平等視して、立ちて迷はず、行うて亂れざるの境涯に入るを得べし。生死を透脫し去り、無常の萬物を遠離し盡したる

とき、初めてそこに安住の境あるを見出すべし、安住の境、これ即ち涅槃なり、樂都なり。

世の友の多くは、この安住の境を求めずして、徒らに名利と權勢とに狂奔し、常に苦惱と、憂悶と、失樂との巷に彷徨す。あはれならずや。

來れ世の友。我等が菩薩は慈悲のみ船に艤ひして、生死の海に沈溺せる我等衆生を救濟し給はんとし、普く安住の門を開きて迷へる我等をさし招ぎたまふ。

急き進みて菩薩の救濟のみ袖に縋らずや。縋りて涅槃の臺にのぼらずや。

『汝等若し勤めて精進すれば事として難きものなし是故に汝等當に勤めて精進すべし譬へば小水の常に流るれば則ち能く石を穿つが如し若し行者の心數々懈廢すれば譬へば火を鑽るに未だ熱からざるに息めば火を得んと欲すと雖も火得べきこと難きが如し是れを精進と名く』(遺教經)

雪山童子は何が故に半偈の法を聽かむがために其身を捨てむとしたまひしや、神光は何が故に臂を斷ちたまひしや、眞如親王は何が故に虎難に遭ひたまひしや、道州は何が故に三十年間四百餘州を行脚したまひしや、大燈國師は何が故に五條橋下に二十年間呻吟せられたまひしや。

古の聖賢すら道を求めて勇猛精進せられたまひしこと、それ斯くの如く、人をして耳をそばたてしむ。我等凡愚、

如何でか勉め勵まざるべけんや。

我等が菩薩は、常に我等と俱にありて、我等を導きたまはんとす。我等今にして猶逡巡進み求むるところなくんば、必ずや永却の悔恨と、久遠の悲痛との門に入らむ。

小枯すさぶ曠野が原にて、はるかに唯一點の火光を認め得たる漂泊の旅人は、たとへそは御佛のゐます淨土なりとも、またそは鬼が住むてふ淺茅が原の破屋なりとも、かゝることに頓着する暇もなくて、たゞ一散になつかし

き燈火見ゆるその方へと走り行くなるべし。

あはれ日は既に西に近きを、我等何時までか野にありて荊のなかにさ迷ふならむ。何ぞ急きて今宵の宿を求めざる。尊き菩薩は久遠の昔より今に至るまで、無限の慈悲と、無限の力とを以つて、我等を救ひたまひ、如何にしてなりとも我等を安住なる地に導かむものをと、しばらくも休息したまふことなし。

世の友よ。我等このかしこき菩薩の大御心の深重なる

を感謝したてまつり、自ら進みて慈悲の門を叩き、菩薩の衿哀のみ袖に縋り。一筋にそのみ力にまかせまいらせん。

我等が世は闇深く、且つ風荒れて雨強し。いたづらに門外にたゞずみて、惱み苦しまんよりは、何ぞ進んで其門を叩き而して求めざる。

叩けよされば開かるべし。

菩薩の慈悲

雨露の澤、よく物を濕ほし、百奔萬木、其恩惠に榮ふるがごとくに、我等が菩薩は我等衆生を憐愍するのあまり、緣あると、緣なきとを問はず、常に施すに絶對無限の慈悲を垂れさせられ、よく我等を饒益したまふ。

世の仁慈あるの醫師は、常に病める人に施すに藥餌を以てし、世の情あるの人は、飢えたる友に惠むに養物を

以てす。さあれ、心靈常に渴きて苦しめる我等に施すに清涼の泉を以てし、煩惱と罪障とより脫せしめて、涅槃の彼岸に導かんとしまふもの、あはれいつくにかある。

上は無上菩提を求め、下は一切衆生を濟度し、俱にともに佛のみ位に上りまつらむと、誓願したまへる我が尊き菩薩の大御情は、既に大慈悲ならずや。

蕞爾たる、我等衆生を救濟せんがため、自己の成佛をすら睹して、大悲慈眼を垂れさせられたまふ。何ものゝ

慈悲か、これより宏大なるものあるべき。

世の仁慈の心といひ、同情の心といひ、この菩薩の慈悲心に比して、幾何ばかりぞ。

親子の情、朋友の信、夫婦の愛、そは深きものあるべし、大なるものあるべし、慈悲に似たるところのものはあるべし。されど、これ等をして、眞の慈悲といひうべきか。

醜を見ては美を欲し、惡を見ては善を欲し、實を求め

んがために虛を排するが如き、かくして、眞の慈悲心をば、いづくにか求むべき。

自己の好めるものには、これを惠み、慈み、自己の好まざるものには、知らざる眞似して、行き過ぎ去らむとするが如きは、これ眞の慈悲心にあらざるなり。

眞の慈悲の心は彼我、愛憎、好惡等、すべてそれ等の相對的見地を脫却して、絕對的平等の見地より自然に湧き出づべきものなり。

我等が菩薩は五濁惡世にさまよひる、我等衆生を濟ひたまはんがために、自己の身をも忘れ、自己の慈悲すらも忘れさせたまひ、無量無限の間、慈悲のみ袖を廣ふして、矜哀の御手を休めたまはず。我等何を以てかこの大御心に答ひたてまつるべき。

世の友、心を靜かにして朝に夕に、己れの爲したる業について顧みよ。我等に果して菩薩の如き慈悲ありたりしか。僞善と虛飾とを離れて、虛心坦懷事に臨み、人に

對したること幾度かありたりし。

人はひとりにて、此の世に活くべきにあらず、一日片時たりとも、他人に據るところなくんば安んずるあたはざるは、之れ我等が常にあらずや。我等が言語と、習慣と、智識と、技能とは、何處より來りしや。衣服と、食物と、住所とは、我等自らこれを爲したるか。

『衣の襞なるは綴々綴婦の涙。飯の香しきは粒々耕夫の油』。

と明の皇帝は曰ひぬ。

我等には、實に他人に據らずして、活くべしと云ひ得べき、何物をも有せざるなり。

身のほとりを見るに、すでに他人の思の十重二十重に、かゝれるにあらずや。されば我等は、常に相互に慈み、助けあふてぞ、世の中に暖かき情をこそ、見らるべけれ。

この相慈み助けあふの心ぞ、眞の人の心にてあるらし。

『實の如く自心を知る』といひ『大悲を根となす』といひ『佛

心とは大慈悲心これなり』といひ。やがてこの眞の心より、溢れ出づべき光りならずや。

今の世の、慈善を口に叫びあるく人の、なほ時として、我等に嫌厭の念をいだかしむるあるもの、あまりに自己を裝はんとすることの、甚だしきなきやを疑はしむればなり。

我等は常に世に處し、人に對するに、我が菩薩の無緣の慈慈に習ふところなくんばあらず。我等世の爲め、人

の爲めに働くと云ふ。其働く前に、先づ自己を捨てざるべからざるなり。世の爲めに事を爲すとか、人の爲めに骨を折るとか、いふが如き念慮少しだにもその心にありなば、そはやがて虚飾にあらずや。僞善にあらずや。内心省みて疚しきものあるにあらずや。

我等が菩薩は常に我等に灑ぐに、絶對無縁の慈悲を以てし給ふ。

無縁の慈悲は即ち無我の愛なり。すべての倫理すべて

の道徳は、みなこの無我といふことを中心として一切の標準を定むべきなり。無我より出でたる大我的活動にあらずんば、眞の活動と云ふべからざるなり。如何ばかり慈悲を灑ぎ、如何ばかり愛を施すと雖も、未だ利己てふ觀念を離るゝことあたはずんば、そは實に惡魔の働きのみ。

この少さき自己の身中に他人をも入れ、社會をも入れ、包容してあますなく、かくしてこそ自己の如何はかり大

なるかを知るべきなり、かくしてこそ眞の慈悲は我等が胸より流れ出つべきなり。

獨立自營なぞ、今の人の福音めかして說くなる、憎からねど、多くは利己的に傾きやすくして、あまりに少さき自己にのみ、執着する嫌ひなきあたはず。自己を擴大し、他人と共に、社會と共に、進み行くところに無量の暖かき、美はしき情を認めずや。

葵を拔きて根を傷り、豆を煮るに豆箕を燃きてまでも、

なほ己れのみ獨り良からんを計るが如きもの、我等これに與みせず。

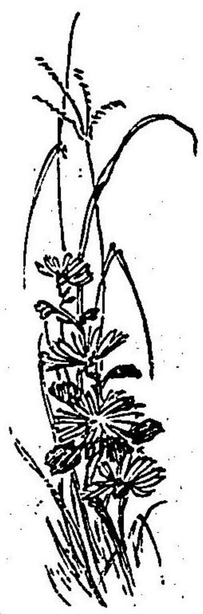
我等、世に立ちて暖かき、美はしき意識を掬しつゝ行くところ、我等が日日の業務に於て、なすべきをなして人に飾らず。業に誇らず。人に飾るところなきが故に、人に怨を得ることなく、業に誇るところなきが故に、願みて、心に疚しからず、老子の所謂『慈あるが故に能く勇なるの生涯に入るを得べし。我が施無畏大士の德、よく

我等をしてかくならしむればなり。

世の友。我等が尊き菩薩は、無縁の大慈悲を示して、我等が爲めに範を垂れさせられたまひぬ。仰げ諸人。仰ぎて菩薩の慈悲に習ふところなからずや。

菩薩の慈悲を仰くの人は、時とところとに常に爲すべきを知りて之れを行ひ、務めて怠らず、自ら顧みて尠しも疚しからず。故に胸中不斷に春風自ら堂に滿つるの感あるべし。

世に菩薩無縁の慈悲を仰ぎ、これに習ふこと能はずと云ふものあらばその人の脂は未だ天を指さざるなり、



菩薩の智慧

我等が身躰に力あるか、我等が頭腦に智慧あるか。我等が身躰は常に鈍り、我等が頭腦は常に眠る。

我等は常に鈍りたるの身躰を以て何をか爲し、常に眠りたるの頭腦を以て何をか考へんとはする。

物に臨み、事に際し、常に假定に基きて、明確なる斷定を降す能はざる我等が智慧は、到底、確固たる安住の

地を、我等に與ふるものにあらざるなり。

見よ、今の知識をのみ重んずる、偏知的教育の結果は自然、我等が心の各種の方面に於ける、發展の調和を失ひて、感情の缺けたるもの、意志の薄弱なるもの、彼れは此れに衝突し此れは彼れに暗闘するもの等、遂に我等をして安慰と光明とを望むことを得ざらしむ。

かくて、我等の智慧は限り無きものにあらざるなり、限りあるものなり。我等はこの限りあるの智慧に從つて

常に安住と常樂との地を欣求せんと欲す。禍ならずや。

限りあるの智慧は、何等の光明をも我等に與へざれば、

我等は常に懷疑と闇黑との域を彷徨し、永久に迷愚と悔恨との境を脱することを得ず。

あゝ懷疑に惑ふものよ、闇黑に苦しむものよ、安慰と光明とを求めんと欲して、徒らに濁りたる、着色せられたる、偏挾なる知識に依らんよりも、寧ろ心眼を開きて菩薩の智慧に接せずや。

我等が菩薩の智慧は限りあるものにあらず。遍く十方を照して、洪大無邊限り知らるべからざるものなり。大なる圓鏡の如くに明瞭に萬象を洞照して諸法の實相を觀察し。平等に大千世界を統理する自然の理法を認め、自由に作用し自在に活動する智慧、之れを我が菩薩の智慧とは名づけたてまつる。

この智慧を以て、我等が菩薩は三界の火宅を出たまひ能く生死海に入りて、一切衆生の煩惱の心病を知り、法

樂を施し、生死を出て菩提に到らしめ、また生死と涅槃との二邊を取る無明の細惑を斷して、生死即涅槃、煩惱即菩提、生佛不二の中道實相の眞理を證して、普く十界の一切凡聖を化度したまふ。

この智慧は始めなき昔より、終りなき後の世に到るまで、永しなへに亘りて變せず。東より、西に、北より、南に、天より、地に普く通遍して及ばすといふところなし、之れ眞理より來りあらはれたまひし大智慧にして、

一毫の虛僞あるなく、一糸の混亂あるなし。

我等が菩薩の智慧は、已に大千に遍滿して我等を照したまひつゝあり。我等心眼を開きて菩薩を拜したてまつるとき、その智慧より放ちたまひる光明我等が心靈に入りて滿ちたまはん。

我等が知れる人のうちには限りあるの智慧を以て萬有を解せんと欲し。ために己れの生命を永遠なる闇黑の領に葬り去りたるものあり。

惑はゞ思へ見るべく、苦まば排すべく、解く能はずんば菩薩の智慧に依るべし。

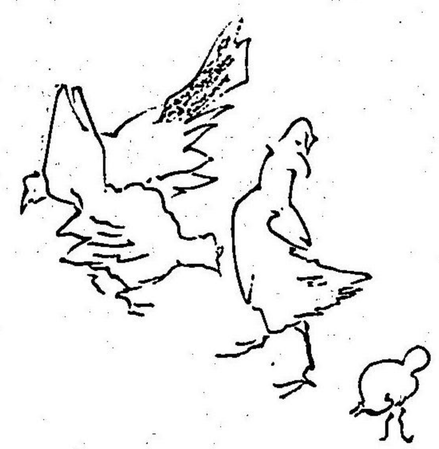
菩薩の智慧、我等が心靈に宿れるとき、我等はこゝに初めて光明と安住との域に達することを得べし。この智慧あるの人にして、かの煩惱罪障等の諸魔を退くることを得べければなり。

眼なくして物を見んとするものは愚なり、菩薩の智慧に接せんとするものは、先づ信仰より入らざる可からず。

熱誠なる信仰によらずして菩薩の智慧を享受せんとするが如きは、木に椽りて魚を求めんとするよりも難し。頑愚なる人は常にかくの如きの難きをなして何の得るところもなく、邪なる道に驅りて、遂に他の人の道に入らんとするものをも妨げんとす。愼まざるべけんや。

我等、厚く菩薩に信頼したてまつり、その靈光に浴し、以て切實なる深誠なる宗教的實驗に入りたらんとき、この智慧、菩薩より降りて我等が心に入りたまひ、ふたた

び我等が心に動きて菩薩に向ひたてまつらん。



勝れたる友

友なしとて嘆くことなかれ。我等が菩薩は我等がために勝れたる友となりたまひるにあらずや。

我等が光明の慈親は久遠の昔より、歡喜の光りと慈悲の光りとを以て、常に我等を呼び我等を招ぎたまひども、智恵なき我等、迷愚なる我等はなほ己れの身のあまりに賤しきを恐れて招ぎに應せず、己れの身のあまりに孤弱

なるを憂ひて行かず。こゝに曠劫の流轉を重ね、不安と苦痛との淵に迷沈して、すでに光明の慈親を忘れはてたり。悲しむべからずや。

慈親これを矜みたまひて我等がためにその大御心を傳へ、安穩の膝下に呼び歸したまはんとて、我等が側近く尊き菩薩を降して勝れたる友となし、倶に伴ひ歸らせしめんとしまひぬ、

幸福ならずとせんや。我等が菩薩は我等がために、勝

れたる友とも、勝れたる兄とも、勝れたる御姉ともなりたまひて、我等を慈み、我等をはぐくみたまふ。

あはれ賤しとて恐れ憂ひし我等、孤弱なりとて悲しみ嘆きし我等。こゝに光明のみ親を得、今や尊き菩薩に伴はる。あゝ我等いかでか歡喜と感謝との念に咽ばざるを得んや。

げにや我が世は蕭條たる冬の枯野にも似て、黑き雨、黑き風さへ降りまさり、吹きしきるに、辿るべき路筋は

さながら蜘蛛手のみたれ、疑惧と迷惑との霧深くたちこめたれば、行く可き道すらも踏み迷ひがちなるを、我等が勝れたる菩薩は、我等がために辿る可き路を指し示し、我等が手をばとりて導きたまふ。

世の友。智慧なしとて憂ふるなかれ、迷愚なりとて悲しむなかれ。我等が勝れたる友は、いかでか我等を沈迷の淵に見捨てたまふべき、慈悲の雨、愛の涙は必ず先づ、我等が心にそゝがれむに、悲しみ憂ふることなくしてあ

れよ。

我等は嘗てある人に依りて「神の怒りに觸れその義罰を恐るゝが故に神を敬ひ神を信ず」と云ふことを聞きたり。

されど世の道の友よ。心を靜かにして想ひ見よ。神の怒りを恐れ、神の義罰を恐るゝが故に神を信ずといふことは、やがてこれ心靈の苦痛にあらずや。心靈の苦痛はこれ人をして自由の境あらばそこに遁れ隱れ以てその苦痛より避けんとするの情を起さしむることなきか。

神を恐るゝが故に神を敬ひ、神より避け遁るゝことあだはざるが故に神を信ずと云はゞ、その人は幸福なる人と云ふことを得ざるなり。

我等が菩薩は我等をして光明の慈親を怖れ遁るゝの情を去り除かしめ、かへつて光明の慈親に近づき、親しみまつることを得せしめたまひぬ。

我等、常に姑息なる友と交り結びし故に、情欲の趣くところ、時と場所とに姑息なる行爲をなして顧みず。遂

に悔恨と、墮落との淵に陷りぬ。あはれ何ぞ早く眼を彼方に向け、聲あげて我等が友を呼ばざりしか。呼びて光明の菩薩と伍せざりしか。

世の友。我等が行く可き道は菩薩これを知りたまひり。只管に菩薩に縋りて行け。

徒らに身のほとりに茂り生ふて、秋をしまだで枯れ行く夏草の色うるはしき婀娜花に心奪はれ魂とられて、菩薩の御手より離れ後るゝことなかれ。菩薩の御手より離

れ後るゝことなくんば、行く可き道を迷はず菩薩の御手より離れ後れなば行く可き道を踏み迷うて、荊棘の間を彷徨すべし。

あゝ我等が光明のみ親は萬能なり、姑息にあらず。我等がこの菩薩と交はるは姑息を捨てゝ萬能に近づくにあり。萬能を企つるにあり。

聞くスピノザは神に醉へる人なりしとか。彼れは常に神と交り、神を見たりしと云ふ。

神を見、佛陀を拜す難きにあらず。我等は聖經の一句にも神を見だてまつるにあらずや、佛典の一語にも佛陀を拜したてまつるにあらずや。唯だ斷間的にして永久に持續せざるもの、我等が絶對そのものに向つて近かんと欲することの熱誠未だ到らざるものあればなり。

我等が一生は菩薩に隨ひ。我等が一日は菩薩に伴はれ。斯て我等一日を菩薩に伴はれて後ずんば我等が一生は菩薩に隨ふてうら安く、菩薩大樂の意に住することを得べし。

信仰の生涯

名も知られぬ野の草の葉末に宿る小さき露の影にも、
尊き光はみちあふれ、秋の木の葉のかつ散るその聲にも、
いみじき響ぞこもれるものを、我等が卑しき身こゝにあ
りて心は常に彼の妙樂の園に逍遙すること得るあるもの、
これ即ち信仰の生涯にあらずや。
我が菩薩の無礙無邊の靈光は煥爛としてよく闇黑の境

を破り、我等をして光明の地に住することを得せしめた
まひり。あはれ菩薩に信賴しまつるの我等、菩薩指導の
下にその去就を決せし我等、行くところとして光明なら
ざるはなく、行くところとして無上の寶珠を與へらるゝ
の感なくんばあらず。

世の友。まことに憫れむにたえたるものは、餓えたる
の人にあらずして麵包の外に食なきの人にあらずや、ま
ことに悲しむにたえたるものは貧しき人にあらずして、

富貴の外に幸福を解せざるの徒にあらずや。

信仰の生涯にあるの人は、赤貧の中に處しても、帝王の羨望すべき樂園ありて存ずるを知れ。

彼の蒼空高く舞ふる鳥を見ずや。我等が大慈大悲者は、かくの如き少さきものにすら大なる樂しみの中を、自由に歡び遊ぶことを得せしめたまひり。今日は美しく野に咲きて、明日は爐に投げ入れらるゝ百合の花にさへも、我等が大慈大悲者は清く香しく彼のソロモンの榮華にも

まされりと聞く、裝をなさしめたまひしにあらずや。

我等よく我が菩薩の下に信伏して、念々に疑はずんば、我等もまた彼の蒼空高く舞ふる鳥の如くに、野に咲く美しき百合の花の如くに、赫灼たる歡喜の靈光に沐浴することを得べし。

我等が菩薩は睿智と、慈愛との極限にましゝて、久遠の古より衆生濟度の志願を起させられたまひぬ。我等は、我等が菩薩のかくばかり尊き弘誓を起させられたま

ひしことに對して、只管に感謝し隨喜し渴仰し憧憬したてまつるの外、他になすべく何ものをも知らざるなり。

我等が菩薩を信仰すといふことは世に處し、身を立てんが爲めにあらずして、菩薩の弘誓を信じ菩薩に賴らむが爲めに世に處し身を立つるにあるなり。即ち我等は、我等が人間としての生活の主腦は、信仰たるなくんばあるべからずと信ずるものなればなり。

佛陀を信じ菩薩に賴るといふことは之れ既に我等が生

涯に於て最も神聖なるものにして、我等が終生の事業はこれを置きて他に求むる可らざるものなり。而してその他百般の經營はみなこれ此の事業を中心として、こを成就せんがための方便たらざるべからざるなり。

蓋爾たる我等、纖弱たる我等、如何に智能を啓き德性を涵養すと雖も、そは到底絕對その者に對しては不完全たるの謗りを免るゝことあたはず、故に我等道を、求むるところの者はその渴仰憧憬の對象たる圓滿無礙の靈覺

に對して、最も痛切に最も深刻に自己の庇弱と自己の罪惡とを感ぜずんばあらず。

なべて、世の人の態を見るに、朝に起き夕に寐る人、誰れかは自己の爲したる仕事につきて、內心深く省みてあるものあるかは。よしそは內心深く自ら省みるところのものあらむも、一點やましき影を認めんにはかたく之れを胸底につゝみ隱して、明らかに惡しきを惡しゝとなして改めんとはせず、かへつてそを掩はんがために重ね

て僞りをなす。頑愚あはれむべからずや。

心に省みて疚しきものあるの人は、その日その日の行爲また正しきことをなし得ざるべし。

世の友。明鏡には暫くも塵影をとゞめしむべからず、日夜務めて拂拭すべきにあらずや。我等が心もまたまた然り。少しにても心に惡しゝと思ふところのものありたらんには、早く悔ひ改むるに躊躇する勿れ。

明らかに自己の罪過を告白し、その心垢を除き去るこ

とを得るの人は之れ眞に勇氣あるの人にして、また幸福なるの人なり。

窃かに今の世の口つから懺悔を唱ふる人を見るに、往々好奇心に驅られて、自己を沽られがため、または他の同情を求めんとするが如きあるもの、之れ眞に勇氣ある人にあらざればなり。之れ眞に懺悔するの人にあらざればなり。

至心に、切實に、自己の罪惡を悔えんにはまた何んの

暇あつてか自ら沽るの要あらんや。自ら他の同情を求むるが如き愚をなさんや。我等が近者、常に耳にする多くの懺悔といひる中には不幸にして多少の修飾あり辯護あるを見る。悲しむべきにあらずや。

之れを要するに斯くの如きの懺悔は人と人、即ち相對と相對との間に於て行はるゝものなれば其傾向としてはまことに免れ難きものたるべし。

我等がいふ懺悔とは、かゝる相對と相對との上にあらは

れたるものにあらずして、我等が渇仰の對象たる絶對その者の前に於て、換言すれば我等が信頼する佛菩薩の前に於て跪座拜伏し、心から切實に我が罪惡を懺悔したてまつるにあり。

而して我等が所謂、罪惡とは我等が日夜に行ふ動作が直ちに佛陀の御心に背けるや否やを考ひ、その背けるところのもの、即ち赫灼たる佛陀の光明に對して疚しきところのものあるをば指していひしなり。

獨り行きて影に愧ぢず、獨り寐ねて衾に愧ぢざる境涯は、是れ即ち我等が到らんと欲するところにして、かくの如く俯仰天地に愧ぢざらんには、まことにこれ天地の寵兒にして、また實に佛陀の爲めに救はれたるの人たるべし。

子が親のために其過失を見出されたるとき、親は子のために敢てもの云はねども、アル名狀すべからざるものありて其子の心に鞭あつるにあらずや。自己の罪は如何

に他に掩ひたりとするも、己れ自らは自らを掩ひ盡す能はずして、自らは之れを知れるにあらずや。況んや光明赫灼たる佛眼の前に脆きて罪障を陳露するに憚るも、如何にしてか、その惠眼をくらまし去るを得べきぞ。

我等が信仰は、先づこの罪惡を反省するの觀念より初まり、懺悔を以て貫徹せざるべからず。且つ我等は常に大悲の恩寵を感謝し、以て自己の本務に勇猛精進せざるべからざるなり。

永遠の生活。長への榮光。無窮の生命。是れ我等が等しく進求して已まざる對象物にして、この信仰こそ實にその理想に到達すべき、唯一の捷路にあらざるなきか。

強固たる信念は、大なる活動をなすに缺く可らざる根本的必要條件なり。蓋し信は力なればなり。而して信仰はまた意志の確立なり、意志の確立は即ち人間存在の意義にあらずして何ぞや。

世の薄志弱行、ともすれば瞿々として自ら泰んせざる

の徒、來りて信仰の生涯に入れ。彼の千古の詩聖ゲーテが所謂『心を動搖せしめずして確然として生活するものは總てに於て善且つ美なり』との言はそが中に無限の味あるを覺ゆるにあらずや。

『思を潛めて道に入るは魔王の縛を脱るゝなり』

魔王の縛を脱れ來りて信仰の生涯に入れるものは、その心、常に歡喜の狀態にあるべし。

清淨光

庭に咲く向日葵を見ずや、朝より夕に至るまで、み空にかゝる日輪を趁ひ、光りにあこがれてまろらかにめぐる。

我等が菩薩は限りなき智慧と、慈悲と、靈化との光明を以て、あまねく我等を照したまひども、我等昏愚にしてこの光明を仰ぎたてまつることを知らず、下俯きて常

に疑惑と煩悶との暗さに迷ふ。

あゝ我等早く長夜の眠りより覺め出て、天を仰いて菩薩の光明を拜したてまつらずんば、心なき庭上の草花にすら恥つべきことの多かるを知る。

菩薩の清淨なる光明は、洪大なるその大御心を我等に示し、卑しき我等が行ひの、あまりに汚れたるありさまを、我等をして自ら省みさせしめたまふ。

よし人は死すとも、その生涯の麗しく清らかならば、

生れ得てまた何のうらみかあるべき。麗しく清らかなる生涯は、これ我等が菩薩の光明によりて辿るべきにあらずや。

我等は菩薩の感化と、引攝との力を感持せんと欲するもの、先つ常にこの光明を拜じまつり、信じまつらざるべからず。

あるものは菩薩の慈悲に救はれずと云ひ、あるものは菩薩の光明に照らされずと云ふ。かくの如き人は畢竟信

仰なきものなればなり。兩眼盲ひたる人は日光如何ばかり天に輝げとも　その光りを仰ぎ見ること能はず、信の眼なきものは常に我等を長養照護したまひる、玲瓏たる菩薩の光明を拜したてまつることを得ず。憐れむべきの極みならずや。

みとりなす野邊の若草は、春の光りにもえ出てたるを見る。我等は常に菩薩慈光の照護により、長へに歡喜の生活をなすべきなり。

世の友、我等が胸裡に宿れる菩提の種子は、よし我等自ら之れを培ふと雖も、温き光明にはぐゝまるゝことなくんば、何れの時かつやゝかなる葉をまとひ、美はしき花をや飾るべき。

我等、常に、この菩薩の光明によりて、自己を省み、菩薩の光明に信頼し、凡てに超へて菩薩を渴仰し、憶念してやまず、我等が信念いよ〳〵内に薫じ、菩薩の光明と相感應し、相融合せんとき、菩提の花こゝに開き匂はむ。

見よ我等、夜の眠より覺めて、朝の光りをうけし時は、
我等が住む世界はみな新らしき裝をなせしにあらずや。
かくの如く菩薩情淨の光り、我等が胸に接する時、不平
と、不滿と、疑惑と、苦惱とはみな既往の夢たりしを知
るなるべし。
あはれ、光明は歡喜の門にして、暗黑は苦惱の道なり、
光明は翼ふべく、暗黑は厭ふべきなり。
朱門を叩いて哀を乞ふもの、黃白の前に節を賣るもの

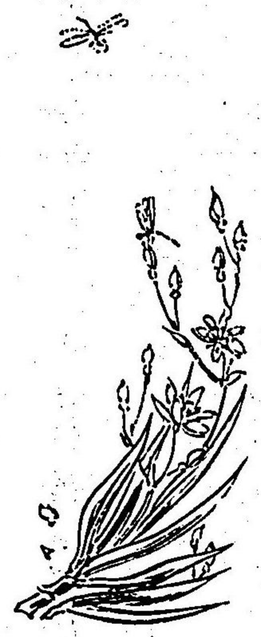
苞苴を行ふもの、賭博を行ふもの、姦淫を行ふもの等あ
らゆる惡德と、あらゆる敗德とは、暗黑の裡に行はるゝ
にあらずや。あゝ我等は到底暗黑の裡に立ちて堪ふるも
のにあらざるなり、我等は到底暗黑の道を辿るに忍びざ
るものなり。すべての慘惻と、すべての苦痛とは、この
暗黑の母より生るゝを知らずや。
光明は人をして、清からしめ安せしめ、喜ばしめ、終
に人をして活動せしむ。額に汗して働くものは幸福なり、

この人は光明を認めたるの人たるべければなり。

あゝ世の苦痛と、惨惻と、悲哀とに泣ける友よ。早く菩薩の光明に接し祝福と榮光との耀ひを仰ぎ、速かに涙を干して、その汚れたる顏に喜びの笑みを堪えよ。

人若しこの菩薩の清淨なる光明を見たてまつり、この光明に接したてまつれば、身はよし逆境にあるも、心は常に安らけく、躰は假令三界無安の境裡にあるも、心は常に淨土の樂園に遊ぶ。

かくて人初めて苦惱なく、無安の境裡に不斷の安穩を得るに至らむ。



海潮音

菩薩大悲の救ひの御手は、我等が胸に觸れさせられたまひぬ。見よ、瓦の如く冷かなりし、我等が胸は温かき靈光をもて、みたされたるにあらずや。

久遠の昔より、間斷なく續けられたまひし我等が菩薩の經營は、遂に迷愚我等が如き者の心胸にすら、希望と光明とを與えたまひ。怠惰我等が如き者にも、慰藉と、

鞭韃とを加え、生氣と精力とを注ぎたまひぬ。

我等、菩薩の天地にありて、目に菩薩の聖容を拜せず、耳に菩薩の法樂を聽かず、惘々として半生を挫過し來れり。今や、我れを呼び醒ます何來の聲に、少しく醒覺し來りて、眼を開けば、新しき天地、新しき世界に生れ出でたるの感なくんばあらず。

我等、目に看るもの、事として新しき衣を着けざるはなく。我等、耳に聽くもの、物として新しき聲を放たざ

るはなし。暗きより明るきに出て、我が心こゝに新に更生りたればなり。

あゝ天に日月の光りなくんば、地のもの何によつてか榮えをいたさん。寂寞たる我が世に、大悲の恩德なくんば、我等が心、何によつてか靜安なる境に托さん。

菩薩慈光の照護に沐浴することを得るものは、福祉ならずや。歡喜と、湧躍とは、長へにその人の胸裡に充たされたまふべければなり。歡喜と湧躍とは活動の源泉に

して、活動はこれ善の最極なるものたるべきにあらずや。

我等、佛陀の大世界にあり。菩薩懷抱の中に入りて、菩薩の大法に從順し、その胸を撫て、その鞠育を受け、怡樂と、安心との醍醐味を感ず。何ものゝ榮か之れに過ぎんや。

あはれ福壽の海、無量にして、攝取不捨のたまものかくばかり洪大なれば、我等は常にこの菩薩に憑りて、安らかなる生涯を辿り、常住なる生命を求めんと欲す。

げにや、菩薩大慈の悲願海よりも深く、法樂常に刧初より、嘗つて不斷の聲をあげ永却なる生命の証を宣りつゝ寄するなる、海潮の響にも似たるかな。

妙音と、觀世音と、梵音と、海潮音と、彼の世間の音より勝れるにあらずや。以て心垢を洗ふべく、以て妙法を觀すべきにあらずや。

仰げよ世の友。我等が菩薩は、み空に輝く滿月のごど、自ら仰ぎ頼るものを救ひたまふ。

風寒き冬の日、群を離れて壑に墜ちたる小羊の温かくも情ある牧人の手に救はれたらむには、如何ばかり嬉しかるべきぞ。

來れよ。法性の宮殿を迷ひ出てゝ、遠き邪惡の道に行き惱まんよりは、早く來りて菩薩の下に安慰を求めずやこゝに歡喜と勇氣と希望との泉、存するものをなどて早く來りて掬せざる。

海潮音　終り

258
735

惟願くは諸佛加護を垂れて　能く一切顚倒の心を滅したまへ　願くは我早く眞性の源を悟りて　速に如來の無上道を證せん。

（心地觀經）

明治四十一年八月十三日印刷
明治四十一年八月十五日發行

海潮音

不許複製

著者　安田慶淳

東京市麻布區飯倉町五丁目四十六番地
發行者　森江佐七

東京市京橋區日吉町十番地
印刷者　中村彌助

佛教各宗和漢洋書肆
發行所　東京市飯倉町五丁目
山口屋旅館内　森江本店
振替口座番號三七二

***

特46
980

海潮音

国立国会図書館

015809-000-1

特46-980

海潮音

安田　慶淳／著

M41. 8

ABC-1559